

末黒野

すぐらの

4月号 (通巻872号)



四温晴

隠沼の日を漁りをり番ひ鴨
雲龍に睨まれたくて冬の寺
飛び付き来る篝の火の粉除夜詣
日と睦み瀬音と睦み恵方道
早梅や稚魚の影透く野の流れ
三寒のひかりとなりぬ野の流れ
潮の香を乗せて松籟四温晴
臘梅や稚児の干し物一竿に

松本三千夫

早梅

町を行く大きな靴音凍てにけり
着ぶくれの脱ぐを待ちをり聴診器
百選の水を掬へば笹鳴けり
着ぶくれの男の子ダックスフント連れ
一月の画廊閑散ビュツフェの絵
丹頂の紅に雪片触れて消ゆ
譲らるる席や隣の咳の人
細雪の降りては消ゆる芝生かな
凍て空の暁の星確とあり
干蒲団赤子の声の二階より
早梅のただ一輪を囲みけり
末社にも頒つ献酒やお元日

黒滝志麻子

(主宰)

神鷄

半端なる庭の片付け冬落暉
弛まざる空の蒼さや木守柚
林泉のちりちりの日や枯薊
煤逃げやスマホ持たずに路線バス
置物めく小流れの鷺初景色
摩天楼の影きはだたせ初明り
大空へ声を千切らせ寒稽古
別腹のある人ばかり女正月
神鷄の大地ひと搔き寒日和
耳二つすまし捉ふる寒さかな
一杓を竜の口より寒の水
遠富士の薄き棚雲春隣

森

清

(副主筆)

堯

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

冬の波郷碑

田中臥石

平成の終の響きや除夜の鐘
寒梅の風を掴みて匂ひけり
打ち捨てて置けと自在の花八手
東京を捨てて育てり龍の玉
あらたまの年の合掌波郷墓碑
斜交ひの冬日や波郷碑を拝す
深大寺蕎麦なかなかに冬落暉
寒椿の枝透く九十九里の海
夜ふたりみたり来爛の酒となす
平成の終の寒涛礁の道

除夜の鐘

森清信子

山茶花や百一歳の大往生
放哉のぬさうなる庵雪蚩
富士の水アルプスの水年用意
禅僧の気魄の反り身除夜の鐘
崩れたる篝の火の香除夜の鐘
海光を弾く巨船や初御空
杓に汲む富士湧水の淑気かな
穏やかに暮らしたし亥の年女
日向ぼこ氏素姓など無き自由
一村を埋めたるダムの寒さかな



久女忌

安齋久英

江ノ電の車窓とろりと小春風
首折れんばかりに潜きかいつぶり
岩壁に波のレシーブ冬深し
年の夜や悔いを明日への糧として
初富士や波の溶け合ふ伊豆相模
初がらす波の高きを越えられず
初凧や空果てしなく磨かれて
初鴉日ざしの方へ急ぎけり
光撒き声を散らせり初雀
冬芽持つ木肌の温み久女の忌

ふる里の餅

石黒興平

一穢無き明るき空や冬桜
散策の乾通りも鴨の頃
退出は淡き冬日の乾門
使いよき筆を洗うて年惜しむ
声高き足湯仲間や冬うらら
寒鰯の箱詰のまま糺られけり
ふる里の餅大きくてよく伸びて
門松に見ゆる老舗の誇りかな
元朝や神鶏ことに落ち着かず
駅伝や二日のへりのホバリング

篝の火

岡野里子

容赦なき風に瞬き枯木星
冬紅葉句座の余韻の収まらず
眠らざる街の灯や除夜の鐘
除夜の鐘一打に躍る篝の火
四方に散る篝の火の粉除夜の鐘
音たてて篝の炎去年今年
百灯の点る百段淑気満つ
冬將軍細小小竹震はせて
夕影となりゆく富士や寒椿
寒念仏音と過ぎゆく僧一団



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



ちやつきらこ

今村千年

いつしかに広き額や初鏡
産土の寺より宮へ初詣
ともかくも妻に従ふ松の内
鳶は舞ひ綾竹舞ひぬちやつきらこ
お囃子に混じる波音ちやつきらこ
縮みては伸びては猫と日向ぼこ
短日や行きつ戻りつ神楽坂

淑 氣

及川照子

臘 梅 高木邦雄

抱負記すペンなめらかや初日記
妻と訪ふ鄙の神名備淑氣満つ
ほのかなる臘梅の香や禅の寺
星の夜や寝酒に熱き卵酒
酔ひ醒めの甘露のごとき寒の水
水脈残し船足速き漁はじめ
雪搔や先陣担ふ叟八十路

一山の闇を破りて淑氣湧く
あけぼのの空刻々と淑氣満つ
老犬の遠吠えを聞く寒夜かな
霜柱崩れ光の万華鏡
波音の響く岬や水仙花
音捨てて靈氣高まる冬の滝
枯すすき枯れの極みの光かな

飾 白 岡田史女

箆を干す二八そば屋や年詰る
帳尻の合はぬ家計簿こつごもり
年の瀬や湯気噴きあぐる餅搗機
臘梅へ開け放ちあり暈の間
飾 白 据 へて 民俗 史料 館
出初なる放水太陽射るがごと
解体の生家跡地や雪積もる

U F O 小田嶋野笛

豊 饒 と 光 り て 近 し 冬 昴
残されて尼ともならず木守柿
溢らする贅沢すこし冬至風呂
U F O めく掃除ロボット煤日和
曲独楽の澄み極まれり寄席の黙
踏み割れば天へかがやく氷かな
縁側は爪を切る場や日脚伸ぶ

初 晴 加藤静江

金色の波頭立て神還
大歳や大合唱の壮巖に
初晴や出港の水脈鮮やかに
元朝やひとりの昼に日の溢れ
枯蓮を悼むかに佇ち鷺一羽
三溪の残せし林泉や冬うらら
綾なせる苑の築山冬紅葉

初 鏡 菅野日出了

臘八や寺のしじまを鵲の声
蔦覆ふなじみの茶房聖樹の灯
ひるがへる巫女の緋袴落葉掻き
紅殻のくすむ赤門花八手
御手洗の処を得たる実南天
白 髪 の 多 さ 諾 ぶ 初 鏡
還暦の嫁と交せる年酒かな

四季折々

今村千年

しばらくは方丈の縁紅しだれ
父祖の地のひと日を花と過ごしけり
鎌倉の八重の山路百千鳥
大寺に矢を射る音や春深み
何着てもかはい盛りや更衣
元町のパン焼く匂ひ街薄暑
掌に小さき掌蛸の夜
揺るるたびシャネルの香り遊び舟

鎌倉はぼんぼり祭夏果てて
ジツパーに喰ひ込んでゐる残暑かな
鴟尾見んと仰ぐ大屋根鱗雲
親も子も片手にスマホ文化の日
宵闇や家路の妻とすれちがふ
身に入むや虚子の山家の文机
藤村の川も古城も暮秋かな
鎌倉や海を抱きて冬ぬくし
日脚伸ぶ机辺に探すパスポート
春近しパレットに足す萌黄色
元朝や富岳阿夫利嶺ひかり合ひ
嬰兒はや石段数ふ初詣

無病息災

阿部重夫

県道を渡りて通ふ恋の猫
椿落つ落ち尽すまでそのまゝに
願はくば無病息災衣更
煙中に摩天楼消え花火果つ
詔勅を聞きしあの日や蟬時雨
明太子のほどよき辛さ冷し酒
体温を越ゆる気温や田水沸く
訪ぬれば萩早散りぬ寺詣
敗戦忌百まで生くる時代来る
爽やかやパレットに溶く空の青
秋霖や露座のみほとけ目を閉ぢて
巨福呂の崖に笹鳴き時頼忌
ラグビーや雄叫び雨を蹴散らせる
巖冬や仕舞ひ忘れの鉢ひとつ
石段につまづきもして初詣

下手投げ

大霜朔朗

回送の続くくバスの停車の雨
路の臺子牛に角の生え始め
初花や横浜に住み五十年
クラス会のも雀の寄らず麦の秋
熟るるとも雀の寄らず麦の秋
苗束を代田に配る下手投げ
五月雨せめて掛軸美人画に
干草や鉏路に向ふレンタカ
スイッチを入れたるがごとく夕立
稲雀ひと先づ逃げて電線に
うそ寒や半袖目立つて校の
都庁より三浦半島秋澄める
旧道面影残し柿の秋
参道の砂利に埋れやか
二白目の腕の疲れやか
餅

朝 桜

齊藤マキ子

うららかなや天使も蝶も飴細工
 朝桜の仔の乳吸ふ力跳ぶ力
 馬照の湖へ散りつぐ残花かな
 夕照の湖へ散りつぐ残花かな
 ぶらの名の読めぬ当て字や山桜桃
 子涼しガラスの鳥の青き翳
 月屑の降りこぼしてや草の露
 星屑の降りこぼしてや盆支度
 噂するこの世にも供養や盆支度
 艶々との世に落ちし木の実かな
 人影の二つ動ききて夜業の灯
 遅れ来て厚きコート置きどころ
 どれどれと箸割り込ます薬喰
 同じ場所と同じ顔して飾売
 海鳴りやよろけ縞なす葱畑

夏 草

千葉恵美子

啄木忌北上川と芽柳と
ひたすらにみちのく人の花を待つ
花の下よちよち歩きの曾孫つれ
夏衣着替へて今日はデーケアへ
夏衣少し派手目に友と逢ふ
夏草やここは馬産地碑の多く
今宵また虫の世界に浸りけり
下駄履いて夜長の庭にしばしかな
野菊晴考の忌妣の忌修しけり
群青の空はてしなく柿たわわり
吊し柿峡の家々灯をともし
孤独なる悩める人に冬の月
雪の降る降る降る町を眠らしめ
猟銃を提げたる漢寒林へ
絵心のあれば書きたし初日の出

二合半

山口登

玻 璃 戸 打 っ 夜 半 の 春 北 風 夢 を 断 ち
 二 合 半 の 酒 分 け あ ひ ぬ 春 の 宵
 鎌 倉 の 孤 客 呼 び こ む し ら す 井
 バ ナ ナ 手 に 声 を か ら し つ 啖 呵 売
 海 開 き 歎 声 運 ぶ 波 頭
 経 年 の 味 あ ふ 梅 酒 ま つ た り と
 足 構 へ 泡 ふ き こ ぼ す 磯 の 蟹
 歴 代 の 並 ぶ 卵 塔 桐 一 葉
 し ら じ ら と 朝 の 光 や 風 の 盆
 山 姥 に 出 会 ひ 叶 は ず 野 路 の 秋
 砂 浜 を 柔 ら か く は む 秋 潮
 菜 園 の 支 柱 を 抜 き て 秋 仕 舞
 新 蕎 麦 や 打 っ 手 は じ め の 豆 絞 り
 拍 手 の 虚 ろ に 響 く 神 の 留 守
 椎 の 木 に 綺 羅 星 宿 る ク リ ス マ ス

柳の芽

荒井貞子

母の忌の寺苑の梅や風硬き
路の臺の香の満つ厨妣の
梅園の日のやはらかし風や
荒川のききらめく風や柳の
芽柳のきらりと池面芭蕉句
春潮の鳥居へ散歩鯉の影
黄菖蒲の列なす川や夜の店
声高の子ら多数や夜店の
雷の夢の宵中まで鳴りに
雨後の宵満月のすぐそこ
盆踊り太鼓打つ子の背の
埠頭より太鼓打つ子はるか
淋しさを秘むる身内や抱く
よき夢を託す日差しや干
寒き野菜干すひと日

流れ星

内田 梢

湯 金 童 飴 松 願 昨 採 雨 いた 名 あ 多 小 青
の 文 ら 袴 茸 ひ 夜 り 兆 た 書 ぁ 摩 流 麦
宿 の は 草 の 事 の た す 家 な 川 の の や
は 日 銀 履 香 皆 雨 の 相 ら の 妙 こと 幽 翁
弾 の 杏 引 り ま で 纏 ひ の 模 の 猫 な る 句
け 字 落 引 や で し の 野 の 果 の 文 字 の あり 碑
る 五 葉 き 喜 言 へ ず 流 女 盆 牛 馬 や 山 金 団 扇 かな なる 音 頭
笑 の 撒 き の 祝 ひ 膳 星 花 意 師 鉢 かな 子 草 柳
ひ 吉 散 五 膳 星 花 意 師 鉢 かな 子 草 柳
女 書 散 七 五 膳 星 花 意 師 鉢 かな 子 草 柳
正 か ら 三 膳 星 花 意 師 鉢 かな 子 草 柳
月 な し 三 膳 星 花 意 師 鉢 かな 子 草 柳

親子象

佐藤喬風

一徹は兜太の矜持臥竜梅
春光を汲みあげてをり釣瓶井戸
研みな山に籠りぬ遠雪崩
みちのくや草の香強き蓬餅
くどくどと老の小言や七変化
黒南風やビルの谷間の将門碑
甚平の縁台占むる笹碁かな
兜煮を骨まで食らふ伊豆の首
封筒の俏し書とやうすら
触るる手に秋冷返す竹の幹
酒蔵の杉玉眩し豊の秋
ささくれの手より受けたり通草の実
鴨来る東雲の雲開きつつ
犬までも畏まりたる御慶かな
親子象鼻高々と五日かな

茅花流し

滋野 暁

お	小	秋	広	草	足	夏	子	忘	茅	渡	こ	千	駒	塗
目	春	澄	ご	ぐ	場	燕	の	れ	葺	し	れ	年	返	替
当	日	む	れ	さ	組	地	思	物	き	場	よ	の	る	へ
て	や	や	る	の	む	の	ひ	茅	に	の	り	焼	草	の
の	喃	多	早	中	音	す	母	花	踊	嵩	は	け	や	駅
新	語	摩	稲	の	の	れ	願	流	る	増	大	た	女	舎
刊	の	の	黄	緋	響	す	ひ	し	幟	す	師	る	の	の
本	あ	水	金	色	き	れ	や	を	や	水	へ	は	句	ひ
や	と	面	に	や	や	を	ね	引	風	や	の	銀	髪	ひ
日	の	の	染	や	雲	を	ぢ	き	立	残	道	杏	切	春
脚	大	光	まり	仙	の	宙	れ	返	ち	残	彼	葉	切	寒
伸	欠	撥	け	翁	の	返	ば	な	返	る	岸	ゆ	り	寒
ぶ	伸	ね	り	花	峰	る	な	し	ぬ	鴨	潮	る	て	し

青炎集

平塚

尾崎千代一

堂に満つ聖夜の黙やほの灯り
寄鍋や湯気の中より語りぐさ

落款へ込む力や夜半の冬
せみ塚や雪の静寂の立石寺
やうやくに三の鳥居や初明り
攔くペンのためらひ跡や寒見舞

横浜

宮元陽子

ボロ市やまな板鳴らすたき売り
絶ちがたき絆あれこれ年の暮
それぞれの一病かかへ去年今年
ボロ市や神棚を売る声盛ん
バス停のスマホする僧毛糸帽
初春や真知子巻して数寄屋橋

黒滝志麻子選

横浜

小林清

賀状書く住所は夫にたのみけり
百均の暦売り場やレジの音
注連飾る鳥居本堂櫻へと
除夜の鐘神も仏も聞き居たる
手を上げて駅改札の雪たるま
手に重き会津産地の冬りんご

横浜

本間せつ

凧の海に憂ひを流しけり
残照や凍てつく海を一閃す
冬薔薇のひとひら残る光かな
暁や何処の霜も見逃さず
がき大将子分従へ冬田道
虎落笛谷戸の鉄塔揺ぎなし



横 浜 藤 沢

枯薦の綾なす壁や鳥暖駝タイ

湯気を噴く圧力鍋や節料理

髭面揃ひ十人分の雑煮椀

早梅や絵馬に数多の希望校

神鈴に轟く太鼓千代の春

鯉大根友と語らふ国言葉

宮 澤 靖 子

煤逃の倅帰りに釣果あり

芙蓉峰は江の島越しの初日かな

傾ぐ字の裏返る字の賀状くる

雑踏へ鈴の音こぼす破魔矢直子な

春の字へ師の朱墨入る筆は小じめ

街路樹の電飾外す春隣

横 浜直悼 両 角 富 貴

古暦一枚のみの重さかな

一病と共に永らへ年越しぬ

戦無き平成惜しむ初詣

冬枯れや梢の栗鼠の頬丸く

初写真膝の曾孫と真ん中に

爪弾きの洩るる路地奥寒ざらひ

横 浜 横 路 尚 子

瀬戸内の燃ゆる落日冬鷗

海原の冴ゆる入日の余韻かな

寒梅の紅著けきや城の跡

開拓の思ひを馳せり鮭雑煮

獅子舞や歌舞伎のやうに見得を切り

枯野に散る帽子の子等の円舞曲

横 浜 有 賀 鈴 乃

行き止まりと見ゆる横丁石路あかり

土壁の剥がるる蔵やみかん熟れ

民思ふ深き御言葉年歩む

もどかしき思ひ数多や年暮るる

開運の幟立つ磴初詣

二万歩やひと日の暮るる福詣

横 浜 塚 越 弥 栄 子

失せ物の忽と出でたる煤払ひ

街角に我が影のみや冬灯

神木に日の差し掛かる淑気かな

添へ書きの一句に和む初便り

干支の鈴二つ求めぬ初大師

薄氷をパリッと踏み登校児

耕 土 集

森清 堯選



蕎喰積の妣より受くるレシピかな

横浜 大内 由紀

初手の歩をすべらする盤淑氣満つ

横浜 高橋 泰子

初富士や歩む二人の磯伝ひ

寒柝や声揃ひたるポランティア

斯く迄の潔き赤冬薔薇

丸々と盛り上がる黄身寒卵

捨て舟に動かぬ鷺や冬日和

横浜 大塚かずよ

薄墨の絵に託したき枯野かな

横浜 白居 澄子

碧眼の手締めあざやか西の市

風呂吹や眼鏡の曇り拭きながら

凍星を浴び打たせ湯を浴びにけり

器量より太き大根買ひにけり

福笑ひ子らの弾くる八畳間

顔合はず前の一寸初鏡

靑空の舞へる鷺五羽初景色

双眸に捨ふ初日や九十九里

横浜 市川 夏子

明け染むる房総半島冬の霧

横須賀 久保寺眞佐子

初日の出海へ織り込む日の斑かな

初漁の船待つ百の鷗どち

冬晴や出窓の猫の身繕ひ

膝を病み手持無沙汰や日向ぼこ

平成を終ふる年輪冬木の芽

お言葉のやさし天皇誕生日

光芒の走る台地や掛大根

煤けたる太き梁ぼたん鍋

白鳳仏

大川暉美

新緑の真つ只中や深大寺
青葉光鬼太郎茶屋の屋根の下駄
駄菓子屋に子の声弾み夏のれん
滔滔と不動の滝や風薫る
磴のぼる光集めて若楓
風涼し山門の磴登り来て
法鼓鳴る青き光の檜若葉
大師堂渡る五月の風清し

句碑歌碑やなんじやもんじやの花の綺羅
芭蕉像立てる寺苑や緑濃き
御手洗の水溢れをり鴨足草
本堂のみ仏涼し合掌す
微笑みの白鳳仏や薫る風
白鳳仏反らす小指の御手涼し
夏木立開山堂へ日の差して
絵タイルの美しき梵字や落し文
園に入る薔薇の香りに誘はれて
薔薇百花競ふ色香に酔ひにけり
日盛の雑木林の葉擦れかな
老鶯や木立へ声を散りばめて

焼芋屋

小川 玉泉

(名誉顧問)

年迎へ手押し車を手放せず
直ぐに煮ゆ卓の焜炉のおでん鍋
とつぷりと暮れて声張る焼芋屋
寄せ鍋に招かれ子らと時過ごす
風呂吹の大根に舌焼きにけり
切り餅の三切れとなりぬ水を替ふ

雑記帳 21

この冬ほど、裏と表の気候の違いを身に染み
た年はなかったと思う。毎朝雨戸を繰る度に、
湘南地帯に住める有り難さに感謝感謝の思いで
ある。身も心も健やかにと願いたい。